

三 題 噺

馬 場 宏 二

研究報告と自称できるほど詰めた準備がないので、以下、この本⁽¹⁾を巡ってやや気楽な三題噺をすることで責を塞ぎたい。

I. バーシェイ氏の日本語力

『近代日本の社会科学』を概観してまず驚いたのは、著者アンドルー・バーシェイ氏の日本語読解力である。欧米の研究者で日本の社会科学を対象とする人は他にもいるが、バーシェイ氏は、山田盛太郎、宇野弘蔵と、特に日本語の難しい学者を抜粋したのではないかとカンگریたくなるような選択をし、そればかりか、第五章では、大内力、玉野井芳郎と並べて馬場宏二まで取り上げている。私事に関わることだが、先にこの第五章を取り上げる。大内・玉野井両先生は、私にとっては直接の恩師である。玉野井先生は教養課程の経済学担当教授で、経済学という学問を初めて学んだ時に接した先生である。もっとも私は、先生の講義が大変魅力的な構成だったので、経済学への興味を唆られたことは事実だが、変転する玉野井理論から、学の骨格に関わるような教示を得た記憶はない。これに対して大内先生は、特にお願ひして入れていただいた無単位演習生だったので、実質的な指導教授であり、宇野理論体系や農業問題や、経済学の骨組みのほとんどを、先生の明快な説明を通して教えられた。両先生と並べて私を取り上げたのは、バーシェイ氏なりの理論的判断があったことだが、私にとっては取り上げられたことだけでも光栄である上に、偶然にもせよ二人の恩師と並べられたのは大変面映ゆいことであった。

そこで本題に戻る。山田盛太郎、宇野弘蔵、ともに難文をもって鳴る学者である。山田は非日常的な漢字を多用し、センテンスにならない句を連ねる。戦前のファンはかえってそれが魅力だったらしく、「再読三読難解を極める」とホメた人（相川春喜）さえいた。もっとも、漢字の羅列に驚かなければ山田の文は案外読み易い。学生時代には悪童共の間で『分析』の暗誦ごっこをして喜んでいたのである。だからここではバーシェイ氏の漢字知識をホメるべきだろう。

これに対して、宇野の文はきちんとしたセンテンスになっているのだが、第一長文であり、否定形が多いので、読む側が息切れする。読み慣れると、これは、一文の中に論理的な次元の異なる命題を連ねており、宇野の思考の緻密性を表現していることが判って来るのだが、この文体に、それと解かるまで読む方のリズムを同調させるのが大変で、私の経験では三年はかかった。思考の論理

⁽¹⁾ Andrew Barshay, *The Social Sciences in Modern Japan*, 2004, Berkeley, University of California Press.
アンドリュー・E・バーシェイ、山田鋭夫訳『近代日本の社会科学』、2007年、NTT出版株式会社

性が文章表現力を越えている点では、宇野はりカードに似ている⁽²⁾し、文章より語りの方が判りやすい点ではスチュアートに似ている⁽³⁾。日本語を母語としないバーシェイ氏が、宇野の難文をこれだけコナせるのは大変なことだと言って良い。

大内力・馬場宏二・玉野井芳郎の三人は、日本語が難しいわけではない。大内氏は、達意平明な文で知られており、玉野井氏の文も明快である。私自身にしても難文を書いたつもりはなく、一般的にはむしろ解り易い方だろう。ただ、思考の屈折を素直に表現できないことが時々あり、短縮的に表現したくなるために造語する癖がある。用語ソフトで編集したがるような最近の若手編集者は、自分が読み切れないことを棚に上げて、原稿の用語にクレームをつけてくることが多い。だから、時々癖のある文を書き、明快さと言う点では大内・玉野井両先生に匹敵しないが、バーシェイ氏が私の文体の癖を的確に掴んでくれたことに敬服するのである。

氏の特徴付けによれば、私は宇野派の gadfly (虻—山田鋭夫氏の苦心の訳によるとうき型) であり、著作は宇野・大内両氏ほど体系的ではない。文体は活気があり (breezier)、時にはけんか腰 (pugnacious) であり、レトリックは辛辣 (tart) である。以上、無条件のホメ言葉は一つもないが、これに続く、私見の要約紹介は極めて正確であり、誤りはほとんどない。敢えて言えば、私が、人類存続のためには先進諸国で消費水準の大幅低下が不可欠だとした指摘の強調が不足していることくらいである。のみならず、私の文体をここまで的確に特徴付けた日本人読者はいなかった。だから拙文への文体批評として、これは国際的初出なのである。

そもそも私はさほど有名な論客ではない。同世代の宇野派の中に、私より国際的にも著名な学者は何人もいる。ところがバーシェイ氏は、そうした著名な論客をさしおいて私見を取り上げたのだが、それがどうやら、私見の論理や概念と同時に、文体の特徴に惹かれてのことだったらしい。とすれば物書きとしてこんな嬉しいことはない。何しろ私には極めて少数の読者しかおらず、その読者にしても、ここまで私の著作を追いかけて文体検出をしてくれた人はなかった。それどころか、私の会社主義論を、自分では全く読みもしないで、左翼のくせに日本をホメる「バカな東大教授」と罵ったことで原稿料を稼いだ、自称左翼評論家さえおり、出版界ではこの評論家の方がよほど著名なのである。

そうしたマイナーな物書きを対象に取り上げて、文体分析まで行なうとは、バーシェイ氏の日本語読解力が、量質ともに、並の日本知識人をかなり上回っていることの証拠であろう。山田盛太郎、宇野弘蔵を取り上げている以上に、私を取り上げたことが、氏の日本語読解力の高さを示すことになるのではあるまいか。

論理と関わるからもう一点だけ取り上げておく。新自由主義—私の後の言葉で言えば自由主義的反動—に対する会社主義の抵抗力に関して、私が「ほとんど精神分裂気味である」とバーシェイ氏は書いている。ここをひどい悪口と解釈した人もいたが、私自身の思考過程を回想すれば、むしろ的確な特徴付けである。私は会社主義をそのまま理想社会だと考えたことはなく、労資関係に社会

⁽²⁾ 参照、馬場宏二『経済学古典探案』2008年御茶ノ水書房第四章、125ページ。

⁽³⁾ 「アダム・スミスは、サー・ジェームズの体系を、その著書を読むよりも彼の会話をきくことによっていっそうよく理解したと伝えられる。」スチュアート中野正訳『経済学原理①』岩波文庫35ページ。『小林昇経済学史著作集 X J. スチュアート新研究』A. 「最初の経済学体系」、20ページにも同じ説の紹介がある。

主義的要素を取り込むことを通じて生産力を上げる、資本主義としてこの上ない方策の体系化だと思っていたが、すでに過剰富裕論を捉え始めていたから、生産力上昇が理想社会への接近だなどは全く考えていなかった。だから世界資本主義体制における会社主義の評価が単線的にならないのは当然である。—もっともその私にしても、日米貿易摩擦以来のアメリカのイデオロギー攻勢に対して、日本の財界・左右を問わず言論界があまりに対米追従的なので、そして日本が国際競争で優位に立った時その余力を吸収すべき社会主義的社会設計力があまりに低いので、次第に会社主義の将来に対する信頼を下げていったのも事実であるが、もっと重要なことは、私が過剰富裕化を着想したのが、会社主義着想とほぼ同時、厳密にはほんのわずか後だったことである。それも、会社主義を考えてそこから理詰めにも過剰富裕を導き出したのではなく、当初全く無関係な概念二つをほぼ同時に考えついたのであって、これは、症状の自覚こそないが、精神分裂に近い思考の作用であった。パーシェイ氏の表現は、悪口ではなく、結構底の深い把握に基づいていたのである。

同時発見の後、しばらくは会社主義への発言を続けた。進行中だった共同研究『現代日本社会』⁽⁴⁾の研究仲間がこれに強く感応したせいもあり、私はこの企画を纏める立場にあったから、それへの発言を続けざるを得なかったためである。だからその企画が完了した後は、むしろ過剰富裕への発言が多くなっている。もっとも、こちらについては逆にひどく評判が悪く、共同研究を組める相手が出なかったばかりか、これを体系化した『新資本主義論』⁽⁵⁾への反応が、私が一番期待した宇野派の若手からは全くなく、支持があったのは医師や絵本作家や保母といった、生身の人間を相手にする非経済学者であり、経済学者の中からは極く少数の熱烈支持⁽⁶⁾が現れたばかりなので、福祉国家や会社主義で社会主義性を吸収しながら経済成長を続ける資本主義に対して、マルクス経済学による資本主義批判が行詰ったのを、過剰富裕化を指摘することで打破したつもりの私としては戸惑うしかなかった。日本の状況がこの程度だった時、慧眼にも私見の鍵概念として過剰富裕化を取り上げたパーシェイ氏は、日本語の能力が高いだけでなく、思想家としての感覚が極めて優れていると評して良い。

II. 日本資本主義論争の知識社会学

第二のトピック。日本でマルクス主義理論が社会科学の中心となり、それが封建論争ないし日本資本主義論争の形を採ったのはなぜか。これまでにいくつかの説明がなされているが、ここではそ

(4) その成果が、東京大学社会科学研究所編『現代日本社会』1~7, 1991~92年, 東京大学出版会である。

(5) 馬場宏二『新資本主義論』1997年, 名古屋大学出版会

(6) これまでに現れた、経済学者中の過剰富裕論支持者と言え、学生時代からの友人で日本経済史家の三和良一(同世代の生活体験がある歴史家だから、敗戦時から見て今日が過剰富裕であることを素直に実感出来る), 大内演習の後輩でソ連経済専門家中山弘正(詩誌『河』111号1997年12月号掲載の, 短文ながら極めて鋭敏的確な書評), 過剰富裕論の軌跡を熱心に追ってくれている, 戸塚茂雄青森大学教授(「過剰富裕化論とその周辺」『専修総合科学研究』14, 2006年10月および戸塚茂雄『過剰富裕化と過剰労働時間』2007年, 開成出版社), それに, 好意的な論評を寄せてくれた田中史郎宮城学院女子大教授(「過剰富裕の経済学」九州大学『経済学研究』65巻3号1998年10月)くらいである。宇野派および東大在職中の若手マルクス学者は, 顔見知りなので本を送っても受け取り状さえ来ない場合が多かった。

れを補う意味で、いわば知識社会学的視角を取り込んでみる。

日本におけるマルクス主義運動が、思想の建て前である労働運動にはならず、農村における小作争議には多少影響したものの、専らインテリの思想運動に留まったのは、単に天皇制に政治的自由主義が不足していたせいではない。明治維新で薩長連合は、それまで正統権力だった徳川幕府を打倒した時、代わるべき正統権力として、自らの手中にある天皇を極度に崇高な君主として演出せざるを得なかった。宗教的にも世俗的にも、それは脆弱性を内包する。藩屏たるべき宮廷貴族は、すでに壊滅状態だった。それを補填すべく大名貴族を急造したが、キャッチアップのための指導層としては能力不足である。近代的統治能力を持つ支配階級を速成するために、近代的教育制度を体系的に制定し、それを人民に開放して能力に応じて上級の訓練を施すことで支配階級をリクルートしなければならない。さしあたり男性に限られたが、大学卒業生は貴族に接する地位を与えられた。大学予備門である高等学校の生徒も、社会的に貴族予備軍としての扱いを受けた。彼らが横文字で西欧社会のあり方を学び、貧しく遅れた日本を顧みたと時、社会向上のためのノーブレス・オブリージュを感じたとしても不思議はない。

近代化＝経済的発展のための西欧思想はつぎつぎと吸収されたが、日本の事態に関して説明能力が高く、世界史的状況からも強力になったのがマルクス主義だった。その革命思想が社会近代化の捷径に見えた。日本のノーブレス・オブリージュの内容はマルクス主義が主流になり、その影響は広く知的エリート層全体に及んだ⁽⁷⁾。一般社会では、マルクス主義はハイカラで危険な舶来品に過ぎず、収穫の半分が現物で小作料として取り去られるために「搾取」が実感出来る小作層へは、志の高い学生を通じて持ち込み得たものの、賃労働のもとで「搾取」の実情が見難く、社会階級としての統合意識が乏しく、実体としても明確でない労働者階級のばあいは、思想の側からのすり寄りがあるのに、主体の側はこれを受け入れようとしなかった。革命より実利が優先したのであろう。

ノーブレス・オブリージュとしてのマルクス主義は、戦後改革の一環で学校制度が大変革されて旧制高等学校が消滅した影響が学生運動に現れた 1950 年代には消滅して行った。それは日本資本主義の高度経済成長と期を一にしたから、ここから後は、農地改革による小作制度の消滅に応じて農民運動が消滅し、労働運動の実利性は経済成長と会社主義が吸収した。表面上は、冷戦の影響を残すマルクス主義的語彙がそれを覆う期間が長く続いたが、宇野理論体系は、そうなった後もなお影響力を持ち続けたのだが、戦後の話はしばらく措く。問題はさし当たり、戦前の資本主義論争における講座派と労農派がどこで分かれたかである。

論客個々人については個別の事情が強く作用したのであろう。特に三二テーゼを主張したコミンテルンや日本共産党との接触の度合いが振り分けに強く影響したと思われる。しかし、社会学的にやや大掴みに観察すると、出自と外遊体験の有無の二つの事情が強く作用していたものと解釈できる⁽⁸⁾。

⁽⁷⁾ おそらく、ロシア革命と同時に米騒動が知的青年に大きな衝撃を与え、マルクス主義志向と重なって、経済学志向が強化されたものと思われる。宇野弘蔵が第六高等学校独法科から東大経済学部へ進んだのと同じ頃、日本における近代経済学のパイオニアである東畑精一が第八高等学校農科から東大農学部農学科第二部(後の農業経済学科)へ進んでいる。東畑は米騒動に強い印象を受けている。参照、東畑精一『私の履歴書』

⁽⁸⁾ 日本資本主義論争史の本は多数あるが、個人レベルまで立ち入った叙述は、比較的後で書かれた、日高普・

教育制度は建て前上は平等主義であり、実際、父を幼時に失って貧困の母子家庭に育った少年が、成績優秀により特待生となり奨学金もを受け、中学校から一高東大を出て内務官僚になり支配層に列するといった事例は、さほど奇異ではないが、それでも、こうした出世コースには社会的上層—地主や有産者—の子弟が多かった。中でも地主の子弟は「搾取」を実見する機会もあり、それに対する自責の念から、講座派的になり易かった。これはロシアにおけるナロードニキと類似する。論客や運動家の出自を詳細に調査したことはないが、有力労農派の論客に地主出身者が少ないことや、さほど代表的でない講座派論客に、意外に地主の子弟が多く、マルクス経済学の演習では教官が労農派なのに学生は圧倒的に講座派が多いといった材料から、こう概括しても間違いのないと思われる。

もう一つが外遊体験—それも思想形成に関わる若い時代の欧米体験—の有無である。代表的論客に関して、このことは明確である。代表的講座派には、留学しない、あるいは出来なかった人が多い。野呂栄太郎、山田盛太郎、服部之総。もっと後の世代になると日本が戦時体制に入っていくから、纏まって留学不能になる。大河内一男、大塚久雄、丸山真人。ここまで来ると、封建論争自体が弾圧され消滅しているから、講座派とも呼べない。むしろ戦後に近代主義と呼ばれ、その後裔が市民社会派と呼ばれるようになる。講座派の代表的論客で外遊体験のある例外は、管見の限りで平野義太郎と羽仁五郎くらいのものである。

これに対して労農派には外遊・留学体験者が多い。中心勢力は東大経済学部からワイマルドイツへ行った集団—無論個々の事情は一樣ではないが—である。大内兵衛、矢内原忠雄、櫛田民蔵、有沢広己、土屋喬雄、向坂逸郎、宇野弘蔵。例外が早稲田系でアメリカ体験のある猪俣津南雄。この集団はもともとワイマル体制を見に行っただけではなく、世界の社会科学の中心地ドイツを目指しており、高学歴のゆえにドイツ語を学んでいた。留学期が来た時、ドイツの敗戦とインフレとワイマル体制化を経験することになったのである。

外遊体験の有無は、モデルとしての欧米社会に関する理解の差として現れる。外遊体験者は、横文字の本には現れない生活の多くの面—匂いや汚れや歪みや隠れた貧しさや差別—を感じ取って来る。欧米が社会モデルであるとしても、それと日本の現実とに、それほど差はないとする実感が出来る。それを唯物史観的歴史図式に当て嵌めれば、同じ資本主義体制の中の先進後進の関係になる。日本の遅れは資本主義として後進性・後発性のゆえである、となる。これに対して外遊非体験者の場合は、欧米社会が横文字の本の中にしかない。それは普通、欧米人が理念に基づいて書いたものだから、それ自身理想社会モデルになっている。その社会像と日本の現実を対比した場合、日本は段階的に遅れていると解し易い。ことに、日本が戦時体制化し軍部独裁全体主義や非合理的な天皇崇拜を強めて行けば、日本はとんでもなく遅れた社会に見え、あらゆる現象を封建制ないしそれ以前の遺制として拾い上げたくなる。講座派とその後裔が日本の知識社会に根強く残ったゆえである。

林健久・桜井毅・渡辺寛・降旗節雄・鈴木博著『日本のマルクス主義』上下、1967/8年、青木書店、および長岡新吉『日本資本主義論争の群像』1984年、ミネルヴァ書房の二著である。ただこれらにも、知識社会学的総括はない。その方向での試みの初発は、馬場宏二『社会科学における不協和音』『社会科学研究』49-2、1997年11月、馬場『マルクス経済学の生き方』2003年、御茶の水書房、第三章。

これにもう一つ付け加えれば、講座派的思想は、戦後アメリカに占領されたことによって、なお生き延びることになった。アメリカは敵国日本の特性を、自国と異なる要素を構造的に持つ社会として理解し、自らの安全のためにそれを解消するように強制した。それが極東裁判であり、新憲法制定を初めとする、いわゆる戦後改革だった。講座派思想はアメリカによって政策的に権威付けられた。逆に、近代先進諸国を欧米と一括してきた日本は、ついにヨーロッパと異なるアメリカの特性を識別できないままにこれを崇拜することになった。アメリカの日本理解が、さまざまの形で日本に逆流した。極東裁判のノーラン検事が、講座派的日本史家ハーバート・ノーマンの友人だったなども戦後初期の一例だが、後には留学や学术交流が有力な経路になる。もっとも、1960年ごろからの南北問題の世界的提起以降になると、日本はむしろ近代化の成功例として評価されるようになり、心情的にこれを嫌った近代主義派や市民社会派が、日本社会の前近代性を言い立てるようになるが、彼らの批評基準は依然として横文字の理念化された近代西欧や特殊アメリカ的近代だったから、封建遺制論はしだいに薄れつつもなお持続することになった。

これに対して『資本論』の徹底的彫琢を基礎に持つ宇野理論体系は、西欧近代社会の基底にある商品経済的—資本主義的行動様式の解明を踏まえていたから、近代社会そのものを理想化しなかった。高度経済成長の中で、宇野体系による「日本資本主義の後進性」に基づく説明力が低下したことはバーシェイ氏が指摘するのとおりだが、宇野体系は、根底にもっと普遍的な近代批判の武器を備えていたのである。もっともそれは、後継者達でさえ簡単には自覚し難いものであったが。

III. 山田盛太郎の講義ぶり

最近『山田盛太郎』⁽⁹⁾を書かれた寺出道雄氏が御同席なので、多少サービスのつもりで、私の山田盛太郎体験をつけ加える。見渡したところ、私はこのシムポジウム参加者中の高齢者であり、あるいは山田の講義を直接聴いた唯一の人間ではないかと思う⁽¹⁰⁾。その山田体験は、寺出氏の本の補足になるだろう。

寺出氏の構図は、山田『日本資本主義分析』の叙述の構造をアヴァンギャルド芸術を下敷きにしたものと捉える、全く斬新なものであり、しかも、言われてみれば極めて説得力が高い。これを読んで私は、「なぜこれを自分で思い付かなかったのだろう」と考えた。山田理論信奉者ではないが、学説は相当良く知っていたつもりだし、アヴァンギャルド芸術は同時進行的に知っていたわけでは無論ないが、花田清輝『アヴァンギャルド芸術』等を通じて、ファンだったからである。結構思いつきをやらさずオレがなぜここを思い至らなかったのだろうと考え、結局山田さんの講義を聴いたことが、そうした思考回路を塞いだためらしいと考え付いた。

私が東大経済学部の学生だった頃、山田先生は定年間近であり、結局三科目計八単位を聴講する

⁽⁹⁾ 寺出道雄『評伝 日本の経済思想 山田盛太郎』2008年、日本経済評論社。

⁽¹⁰⁾ 演習や研究会等で山田盛太郎と個人的に接触が多かった、吉原泰助氏のご出席なことは気づいていたが、彼は法学部出身だから経済学部の正規の講義は聴講してないだろうと勝手に推測していた。また、土地制度史学会と関わりの深い島崎美代子氏のご出席だったことは、シムポジウム終了後になって気づいた。迂闊な話である(2009年5月30日)。

ことになった。駒場への突き出し講義「経済政策論」2 単位、本郷での必須的科目「農政学」4 単位、そして、定年を迎えられる先生の告別講義で終わる形の慣例的な特殊講義である、「日本資本主義論」2 単位。

山田先生は訥弁である。訥弁で、帝国大学教授らしい厳かな口調で、重々しく考え考え語られる。立て板に水が流れるような講義ではない。「これがアノー」といったきり次の語が出てこないことがよくある。しばらくしてつなぎに「これがコノー」、また間があって「これがソノー」。こちらがイライラして「つぎはドノーですか」と問いたくなる。板書はよくなさる。横文字か漢字の、難しい概念・用語である。横文字は横につぶした形だから縦幅だけ結構大きくなる。漢字は逆に縦につぶして横長に広げた形である。どちらも、書いた時の手元を見ていなければ判読出来ない。だから講義は謹厳実直荘重でありながら妙に無器用で、しばしば滑稽になる。この無器用で滑稽な講義を三科目八単位聴講したら、山田理論と、目映いばかりに鋭角的なアヴァンギャルド芸術とを結びつける発想は浮かばない。

滑稽と言えば、一年上の有沢先生の告別講義で、山田先生が挨拶を述べられた時のこと。矢内原忠雄総長が後輩のセレモニーを聴講に来ていた。山田先生は矢内原教授告別講義を回想して、重々しく、「顧みますれば、かの、矢内原シェンシェイの告別式」とやらかした。その時点で矢内原がその場にいたかどうか記憶確かでないが、現総長が少し前に殺されてしまった。謹厳な告別講義が満場大爆笑。御本人も気づいて、顔をクシャクシャにして苦笑した。大変愛嬌のある笑顔だった。

最初の「経済政策論」は真面目に聴講した。試験問題が三問中一問選択で、その一つが再生産表式とはいかなるものか説明せよ、だった。これは $Iv + M = IIc$ の関係さえ掴んでおけば、後は適当に補足すれば良い。数値を記憶しておく必要さえない。ごちゃごちゃ書かなくとも済むことだから、すぐこれに飛びついた。この瞬間に思考の波長が山田先生のそれと一致したらしかった。成績は無論優。それから後は本郷での授業だから、大内先生の無単位演習には皆勤したが、他の講義はほとんど出なかった。下宿にいて好きな本を読んだり、アルバイトに行ったり、自治会室で議論していたり。土屋喬雄やら大河内一男やら、著名な先生の講義には、最初に顔を見るために出席したが、後は出なかった。山田先生は改めて顔を見に行く必要がなかったから出ないままで試験を受け、2 科目とも同じ答案を書いて、優を頂いた。小宮隆太郎氏が、マル経の山田先生から、多分文体模写によってだろう、全部優を貰ったと自慢していたが、ナニ、こちらも全部優で、答案は三つとも同じだったのである。全優は望べくもなかったが、山田先生のおかげで優が過半を大分越えた。有り難い恩師である。

山田先生の告別講義は出席した。セレモニーだから、前座が何人かしゃべって後御本人が登壇する。普通の先生は、そこで回顧談か学部の将来への戒め、さもなければ後々語り伝えられるような名言を述べる。ところが山田先生、「アノ、本当の講義であります」。これには聴衆一同ザワザワとどよめいた。そして実際に「日本資本主義」の括りが語られた。

一般の資本主義は十年に一度の恐慌を起こしながら重工業化する。日本資本主義は、代わりに十年に一度戦争を起こし、先の大戦で鉄鋼生産が年 500 万トンを超えた。これで第一部門が確立した。「もう戦争は要らないでしょう」。この後が、今後日本資本主義は平和の内に発展を続けるだろうと展望を語られたのか、平和的発展が続くことを望むと願望を語られたのか、その記憶が今一つはっ

International Symposium

きりしないのだが、ともかく大変印象的な括りであった。

無論これは、論理的にはムチャクチャな議論である。戦争は重工業化を目的として起こすわけではない。重工業がある程度の規模に達したからといってそれが生産手段生産部門確立の指標になるわけでもない。第一部門が確立した資本主義が平和的に発展するものなら、帝国主義的侵略などは起こり得ないはずである。だがこれは、不思議に印象的な議論だった。異例の「本当の講義」に未来展望の素材が埋め込まれていた。山田理論の底にアヴァンギャルド芸術があるというのは、こういうことだったのかも知れない。私はそれに、直感的に感応していたのである。